

逢ふ夜

泉鏡花作

路地にかた／＼と、小刻で忍びやかながら、些と蓮葉な駒下駄の音がする、と木戸際の闇に腕組みをして、ひつたり附着いて立つて居た男は、つと霞に包まれたやうに、其の身を引緊めた兩の肩も柔かに成つて、夜露に冷たい袖にも、ほんのりと、梅が香が通ふと思つた。

秋も半ばの初夜過ぎて、婦も最う二十五を越したのに

其のまだうら若かつた十九の春、男が微酔で、懇意は後廻しの日の暮方、年始に来ると、羽子板に袂を懸けて、對手欲しさうに、兩側の小松を楯に、年の内のを大事に持した三日目頃の、一寸ほつれたのも美しい、水の垂りさうな高島田で、此の裏通りの、向うの湯屋に早や燈の入つたのを、日が短かさうな、もの足りない、派手な顔して覗いて居たのが、ト其と見ると、見迎への會釋に、黙つて、目

のふちをほんのりさして、羽子板を胸へ抱くや、八ツ口がひらりと翻る、襟足の雪すつきりと、背後を見せて、

「母さん、兄さんが。」

で、カタノと、路地を右側の中ほどに駆込んだものだつけ。ー

つい、其の時の跫音を、今ので、ものゝ、音々を聞くやうに思出した。

通ふ千鳥の辻占は、行くのも、来るのも戀路である。

カタリと留まると、すつと瘦ぎすな肩を出して、ほのかに／＼白う差覗いた顔は、婀娜に細つて、且つあはれに窺れて居る。

「可いのよ。」

「構はない？」

「えゝ、づん／＼お入んなされば可いのに。」

「然う暢氣には参りませんよ、店に人でも居ると

悪い。」「

と低聲で云ふ。路地の、矢張中ほどに、ぶはりとした、便りない、灰色の暖簾を漏れて射す、電燈が其で、此の婦の弟が、屋臺で鮓を賣つて居る

兩側の長屋は眞暗で、いづれも寝た。

音の沈んだ、陰氣な電車が、細い行抜けの大通りを、星の流るゝやうに走ると、風が颯と、柳も見えぬ暖簾が戦ぐ。

「大丈夫よ。今頃食べに來たつて、皆近所の若衆や、お店の人たちですもの。」「

「尚ほ悪い。」「口が煩いから、」「

「だつて、構ふもんですか、知れると可恐い旦那でもありはせずさ、」「

「其のかはり借金だらけだ。」「

「可厭ねえ。」「と悄乎俯向く、トくつきりと襟が白い。

實は大病だったので、親許へ歸つて養生して、最  
う此のくらゐにまでも快く成つたが、まだ、枕に着  
いて居る分で、抱主の方へは歸らないから、義理で、  
晴れては逢はれぬのである。

處を、優しい、實の母親が合點で、今夜なぞも何  
處か近所の、目立たない鳥屋の、奥二階あたりで密  
と逢つた。

「貴方がお好だから、今日はね、朝つから掛つて、  
新栗で、（ふくませ）を拵へて置いたのよ。

宵に誘つて下すつた時、お茶うけに上げませう  
と思つたけれど、これから一口あがるのに、先へ立  
つて甘いものは不可ませんから、出さないで置きま  
した。歸りがけに寄つて頂戴。」

「母様や小兒たちは最う寝たらう。狭い處を氣の  
毒だ。」

「憚り様ですよ。」  
「持つて来てくれりや可いのに。」  
「だつて、をかしいんですもの。」  
ねえ、お

寄んなさいな、お内へだつて、まだ時間は可いわ。」

柳と塀と、軒燈と、土藏の壁、時々分れて歩いたのが、此の路地口へ來ると、婦が猶豫はず、つか／＼と入つた後を、男は遠慮して木戸口に待つたのであつた。

「入らつしやいな、誰も居ない。」

と先へ立つて、地内に祭つた小さな稻荷堂の前を、婦は一寸拜むで通つた。

暖簾越に、男が、

「松ちやん、前刻は。」

「や、お歸んなさいまし。」

松次郎と云ふ弟が、浴衣の上へ、紺のめくら縞の筒袖を着て、向うの臺に腰を掛けて、小鰭の鮓の酢の香、笹の葉色も散る柳で、屋臺の上に唯一ツの螢のやうな電燈と、寂しさうな睨めくらで。

「さあ、何うぞ。」  
「お邪魔をしますね。」  
「何ういたしまして。」

横に折れると、別についた出入り口の格子戸が  
差當り誰に遠慮もなさうながら、それでも包  
ましよう、細目を開けた、心遣ひ。其の癖、いそ／＼  
と氣が急いたか、些と粗雑な駒下駄の土間の形。

\* \* \* \* \*

下

直ぐに上框が、階子段の下の狭い四疊半、唯一間  
で、向うの壁の前に爐が切つてあつて、店を仕劃の  
障子の隅に、帳場兼帯、小兒たちが復習をする、小  
机が据ゑてある。

其處に座蒲團が直してあつた。

「松ちゃん、涼しく成りましたね。」

「めつきり、何うも。」

と肩越に向けた顔は、ふツくりと、姉が二十の面

影あり。

「景氣は、何うです。」

「へい、ぼつ／＼、」と莞爾する。

婦が二階から、みし／＼と、其細い力ない、病上りにも響く身上。盆にも乗せず、内端に蓋茶碗を持つて下りて、ト其机の上へ。 爐の向うへ、疲れたやうにくの字に坐つた。内證で、毒を>五つ六つ久しぶりで相をしたので、寝て居る二階の母親の前を、一生懸命に殺した、憚る酔の呼吸づかひ、うつすり乳の透くやうな胸へ響く。

突如手を出すのを、

「お待ちなさいよ。」

と、繻子の帯が、ぎうと云ふ、紙入を抜いて解く、と楊枝を細い指で、長く（ふくませ）に二本刺す。



目は、きよる／＼と射るが如く、奥を透かして見越すから、男は机に肱を支いて、ぐい、と障子に胸を入れた。

「見えやしませんよ、暗いから、」と密と云つた。

店頭で、

「身體は何うかい。」

「もしや／＼と舌の音を大きく立てる。ト婦は悚氣としたやうに肩を窺めた。」

「へい？」

と松次郎が、斜つかひに成つて、すか／＼と握りながら、怪訝さうな目色をして、

「何うもしやしませんです。」

「うんや。」

「ひちや／＼と舌舐づり。」

「病氣は何うぢや聞くんぢやが。」

き様ん許

に娘が居るぢやろ。何へ 出て居る、

姉

か。

「

「へい、何うもはつきりいたしません。」

「不可んなあ。何うぢや、一寸、様子を見て遣ら

うか。 あゝ、俺は酔つては居らんぞ。 醫者

だ。」

「あの、頭取よ 「と男の耳へ、爐を膝で越して肩を抱くやうに囁いた。 ー 黙つて頷く。」

「へい。」とばかりで松次郎はニヤリと笑ふ。

「うむ、見舞うて遣らう、俺が來たと云うてくれい。 然う云や分る。 何は、 居るぢやらう。」

「ですが、最う寝ましたよ。」

「寢床で可え。」

「否、母親だの、大勢寝てますから。 また晝間でもお出で下さいまし、 ですがね、姉は病氣の所為か、きたいに他人さまにお目に懸る事を嫌ひましてね、へい。」

其時、楊枝を上へ取ると、婦の同じ栗にさつて居たので、一緒にすつと宙へ上る。 目を見合はせて、莞爾笑ふと、云合はせたやうに、黙つて落す、 擽られたやうに身を揉んで、男の膝へ、前髪を冷りと伏せた。

あとで路地口で別れた時は、其の店も最う閉つて居た。

婦の胸は、木戸の扉について凭れるやうに、男の背を追ひながら、ふら／＼と路地の内から鎖したのであつた。

口で覗くか、と、ひつたりと顔を當てて、

「濟みませんがね、私が内へ入るまで、其處に見て居て下さいましな。小兒の時から、お馴染なんですから、暗いとお稻荷さんの前が可恐いんですから。」

古い木戸の懸金がこはれて居るので、お長屋中約束の、手ごろの石を、ト秋風に弱く搥ふ両手で壓して、木戸の戸の根へひたりと着けた。

外から、密と一つ、軽く叩いて、トンと云はして、「心細いなあ、然うされると。」

「可い事よ、貴方の力で壓せば開くのよ。」

【完】